

『転身譜』第15巻跋詞の訳におけるジョージ・サンズの変容

大久保 友博

17世紀前半の英国に活躍した翻訳者のひとりであり、英国本国だけでなく中近東から北米大陸までを転々とした旅人としても知られているジョージ・サンズ (George Sandys 1578-1644) は、オウィディウス (Publius Ovidius Naso BCE 43-CE 17) の『転身譜 (変身物語)』 (*Metamorphoses*) の翻訳と注釈 (*Ovid's Metamorphosis Englished*) で英文学史的には有名である。ただしその訳本には、大きく分けて3つのヴァージョンがあり、訳文にそれぞれ差があることはあまり知られていない。本論では、3つの訳本のあいだでも差異が特徴的な第15巻跋詞の訳を取り上げ、各時点における詩人の立場の変化を読もうとする試みである。

1

サンズが翻訳に用いた底本はすでに特定されているので (David, "Volumes" 452; Rubin 114-115, 178-181)、まずは Sabinus 版と呼ばれるその本の跋詞部分を以下に引用する。

Iamque opus exegi, quod nec Iouis ira, nec ignis,
 Nec poterit ferrum, nec edax abolere vetustas.
 Cum volet illa dies, quae nil, nisi corporis huius
 Ius habet, incerti spatium mihi finiat aevi.
 Parte tamen meliore mei super alta perennis
 Astra ferar, nomenq[ue] erit indelebile nostrum.
 Quaque patet domitis Romana potentia terris,
 Ore legar populi, perque omnia secula fama,
 Si quid habent veri Vatum praesagia, viam. (Sabinus 550)

現代の校訂版では第15巻の871～879行目にあたる部分 (Tarrant 15: ll. 871-879) であるが、日本語での大意は、以下ようになる。

今やここに完結された私の作品は、ユピテルの怒りも、焰も剣も、また貪婪な歳月の歯牙もこれを滅ぼすことはできないであろう。ただこの肉体にしか力を及ぼしえないあの宿業の日は、望むがままにいつでも、定めなきわが生涯を終らせるがよい。けれども、私のよりすぐれた部分は、はるかに高く星辰のかなたに運ばれて、私の名前も、永遠に滅び去ることはあるまい。そしてローマの威勢が征服された地上の世界に拡がるかぎり、私は、人々の口に読まれ、そして、詩人の予感にもいくばくかの真実があるならば、あらゆる世紀を通ずる名声によって、生き続けるであろう。(松本 439)

上記の部分を、まず 1621 年に刊行された訳本 (*The First Five Bookes of Ovids Metamorphosis*) のなかで、サンズは以下のように訳している。

Now haue I ended, what the Thunders rage,
Nor fire, nor steele shall raze, nor eating Age.
Come when it will my death's vncertayn houre;
Which o're this body onely hath a powre.
Yet shall my better part transcend the skie:
And my immortall Name shall neuer die.
For, wheresoe're the *Roman Egles* spred
Their conquering wings, I shall of all be read.
And, if we Prophets true presages giue;
I, in my fame, eternally shall liue. (Sandys, *First* ¶2; 下線部筆者)

ここで付記しておかなければならないことは、1621 年の訳本は題名にもあるように、冒頭 5 巻のみの訳本だということである。ただし、跋詞の訳だけは特別に巻頭に添えられている。訳本には、序文の代わりにオウィディウスを詩人として擁護する各時代の文章が抜粋されているのだが、その最初のものとして上の訳文が現れている。

サンズは、英雄詩形に近い二行ずつ脚韻を踏む五歩格を用いているが、もちろん原典の 1 行の要素がいつも 10 音節に収まるわけではないため、大抵は意味要素を少し削ることになる。また元のラテン語詩では 2 行単位で進むわけではないため、区切りが合わないことがあり、1 行もしくは半行ほど余ることがあるのだが、そこは敷衍して埋めるか、削った要素の補填に用いるかすることになる。

この 1621 年の訳でも細部が異なっており、雷・火・鉄器が誰のものであるか消されている上、原典では詩人一般であったところを〈我々預言者〉と呼称している。"prophet" の語源は、他人のために語る者・代弁者を意味するギリシア語であるが、当時のサンズの役割と重なるところがある。というのも、この翻訳の刊行直前、サンズは実兄らの関わる植民地経営会社で、プロパガ

ンダの一端を担っていたからである。

当時議員・政治家として活動していた次兄エドウィン・サンズ (Edwin Sandys 1561-1629) は、北米の植民地経営を目的とする合資会社ヴァージニア・カンパニー (Virginia Company、以下 VC) に深く関わっており、この弟を株主のひとりとして招き入れたのである。国から勅許を与えられ、出資者も最終的に1700人近くにのぼったという、この民間の一大冒険事業には大量の資金が必要で、そのためには人の心を動かす必要があった。そのために用いられたのが言葉を用いたメディアである。演劇・詩・翻訳・説教・パンフレットといった様々な媒体で、宗教をはじめ文明や伝説・財宝などのレトリックを駆使し、宣伝・広報が試みられた (Davis, *George* 85-93; Grizzard xxxiii; Rabb 319-352)。この流れのなかでサンズが取り組んだのが、そのまま〈植民〉をテーマとしたウェルギリウス『アエネーイス』 (Publius Vergilius Maro BCE70-BCE19, *Aeneis*) 第1巻の翻訳である。訳出時期としては1615～17年のあいだと推定されており、この際には本としては刊行されず、手稿で回覧されたものと思われる (Ellison 82, 101-103)。やがて VC 内で発言力を増していった次兄の手駒とされ、サンズは1621年にヴァージニア植民地の新しい現地出納係として出向させられることとなる。

そしてまた彼自身がどこまで植民地の現状を認識していたかわからないが、急激な人口増加によってヴァージニアは食糧問題に陥り、不適切な衣食住によって高い死亡率を有していた (Forry 25-26)。植民地への航海がなかば死出への旅であるのならば、訳書冒頭に掲げられたこの詩行は遺言めいた様相を帯び始める。肉体を減らす各種要因の属性を消したのは、ひとつには一般化するためでもあろうが、暗に VC やこれから待ち受ける苦難を示すためとも読める。プロパガンダではない訳詩を世に出すことで、死んだあとにも何かを残しておきたかったのかもしれない。

あるいはマイケル・ドレイトン (Michael Drayton 1563-1631) は出発するサンズへ宛てた送別の詩で、こう書いている。

And (worthy GEORGE) by industry and use,
Let's see what lines Virginia will produce.
Go on with OVID, as you have begun
With the first five books; let your numbers run
Glib as the former, so shall it live long,
And do much honour to the English tongue. (Drayton *ll.* 37-42; 下線部筆者)

この励ましはサンズの訳へ、作品を長生きさせなければそれまでの5巻と同様に続きを書け、と応答する形をとっているが、それによって英国 (英語) への貢献を求める点で、翻訳を愛国の文脈に回収しようという働きがあるようにも思える。出すものすべてが宣伝に利用されると知ってサンズが訳書を出したのなら、『転身譜』縮めくりの詩行は、〈たとえ代弁者としての訳業になるのだとしても、それでもそこに何かしらの真実の詩があるなら不滅である〉という静かな意思

にもなるだろう。

2

冒頭5巻の訳を出したあと、サンズは植民地に向かう船内と目的地のジェームズタウン (Jamestown) で『転身譜』の全訳に取り組み、帰国後の1626年に全15巻の訳 (*Ovid's Metamorphosis Englished*) を出版する。その訳本のなかで、跋詞の表現は以前のものより少し変わっている。

And now the Worke is ended, which, Ioue's rage,
Nor Fire, nor Sword shall raze, nor eating Age.
Come when it will my deaths vncertaine howre;
Which onely of my body hath a powre:
Yet Shall my better Part transcend the skie;
And my immortall name shall neuer die.
For, where-so-ere the *Roman* Eagles spread
Their conquering wings, I shall of all be read:
And, if we Prophets truly can diuine,
I, in my liuing Fame, shall euer shine. (Sandys, 1626 326; 下線部筆者)

〈作品〉という言葉が現れ、〈この身〉は〈わが身〉となり、自己が明確化される。ここにはもちろん、自身が全訳を果たしたという自負もあるだろう。サンズは植民地から友人へ送った手紙で、翻訳に取り組んでいることを報告している。

Yet amongst the roreing of the seas, the rustling of the Shrowdes, and Clamour of Saylers, I translated two bookes, and will perhaps when the sweltring heat of the day confines me to my Chamber give a further assaye. for w^{ch} if I be taxt I haue noe other excuse but that it was the recreaçon of my idle howers, [...] (Kingsbury 4: 66)

「海のうなり、マストのはためき、水夫らの怒号のなかでも」あるいは「日中のうだる暑さで部屋から出られないときは、さらに試みたい」ということだが、とはいえ船内も植民地も、文筆作業に適しているとは言い難い。17世紀の船の環境は劣悪で、船首が重く横揺れ縦揺れが激しいだけでなく、不衛生でもあり、〈浮かぶスラム〉と言われるほどであった (Hugget 11; Humble 28; Lloyd 64) し、植民地での翻訳は「ただこれは暇なときの気晴らしだから」と言い訳しており、仕事や心の余裕が出てきたようにも見えるが、当時の植民地の状況を考えると彼に暇があるはず

もない。手紙が書かれたのは1623年3月28日のことで、ヴァージニア植民地に壊滅的打撃を与えた前年3月の先住民強襲からまだ人も町も立ち直れていない時期だったからだ。次兄エドウィンの採った植民地の土地拡大策と、サンズを初めとする現地責任者たちの弛緩しきった経営方針とが裏目に出て、多数のプランテーションや集落が全滅し、当時の植民地人口の1/3近い400人が殺害された(Davis, *George* 121, 126; "Literary" 48; Ellison: 84, 117; Forman 56; Forry 27; Grizzard 1; Jester 257; Kingsbury 3: 541-571; Neil 317-346; Price 205-208)。その事件の際に植民地の各種仕事の担当者が大勢死んだため、サンズはそれまでの業務のほか、死んだ者の代理を一手に引き受けなければならなかった。ガラス工房や製鉄・造船業の再建、プランテーションの店子からの徴収に加えて、新たに小作人管理、先住民への報復、学校・司法の仕切り、友好的先住民との交渉、隣町の徴収、助役の仕事から議会の書記に至るまで、明らかに仕事量が激増している(Davis, *George* 163-68; "Literary" 51; Grizzard 195)。実際、サンズは島周辺の川沿いに3つのプランテーションを有していたが、仕事が忙しすぎてそちらにはまったく出向けていないと同じ手紙に述べており、間借りしていたジェームズタウン町長の家と植民地庁舎を往復するばかりだった(Forman 33-34, 79; Kingsbury 4: 67; Mallios 9-10, 14-18)。そんななかでどれほどの時間が翻訳に割けたのか、もしやろうとするなら夜の睡眠時間を無理に削るほかないだろう。それでも1626年に全訳が出たということは、多忙ながら残り半分の8巻分およそ6500行をサンズは3年で訳し切ったわけである。作品の完成は、潜在的に選択可能な無数の訳語のなかから"work"という言葉や、そして自らの身の危険は"my body"という訳語を顕在化させ、自分にとって現実味を帯びたものとして選べるようにしたのである。

雷が原典通り残酷な大神ユピテルに戻り、ラテン語的な〈鉄器〉という言い方がより直接的な〈剣〉に変わるのには、運命と事件を強調するためか。植民地の体験を経て〈我々代弁者〉には無能な植民地の役員や暗愚な本国の経営陣・宣伝者のニュアンスが響き、〈予知する／察知する〉の意の動詞"divine"と〈輝く〉の"shine"の脚韻で構成される書き換えられた2行では、無冠詞複数によって保たれていた「いくばくか」のニュアンスが消え、新たに現れた助動詞"can"のためにどこか反語的にすら聞こえる。〈もし予知が可能だったなら〉、あるいは"can"を原義に寄せれば〈察知する方法を知っていたなら〉、何をかという対象は言うまでもなく1622年の事件である。実際、複数の歴史家によれば、事件の予兆もその企みの報告も直前にはっきりとあり、原因を植民地経営者の慢心や無能に帰する説さえある(Price 205; ヒューム 209, 231-232, 238)。それすらも予知できなかったVCの自分は、この先輝く運命など来るはずもない、という自己否定でもあるだろう。

この自己否定的ニュアンスは、1626年版の他の箇所でも見られる。

Bisque datam, primum partu, mox stipite raptu,
 Redde animam: vel me fraternis adde sepulchris.
 Et cupio, & nequeo. quid agam? modo vulnera fratrum

Ante oculos mihi sunt, & tantae caedis imago.
 Nunc animum pietas, materna[ue] nomina frangunt.
 Me miseram; male vincetis, sed vincite fratres,
 Dummodo quae dederō vobis solatia, vosque
 Ipsa sequar. dixit: dextra[ue] auersa trementi
 Funereum torrem medios coniecit in ignes.
 Aut dedit, aut visus gemitus est ille dedisse
 Stipes, & inuitis correptus ab ignibus arsit. (Sabinus 276-277; 下線部筆者)

Thy twice-giuen life restore; first by my womb,
 Last by this rauisht brand; or me a tomb
 With my poore brothers. Faine I would persue
 Reuenge; yet would not. O, what shall I doe!
 Before my eyes my brothers wounds now bleed:
 And the sad image of so soule a deed.
 Now pittie, and a mothers name controule
 My sterne intention ô distracted soule!
You haue won, my brothers; but, alas, ill won:
 So that, while thus I comfort you, I run
 Your fate. With eyes reuerst, her quaking hand
 To trembling flames expos'd the funerall brand.
 The Brand appeares to sighe, or sighes expires:
 Wrapt in th'imbracements of vnwilling fires. (Sandys, 1626 162; 下線部筆者)

上記の引用は第8巻、勇氣比べと色恋沙汰から母の兄弟を殺してしまったメレアグロス、その母が呪う箇所である (Tarrant 8: ll. 504-514)。息子の勝利に対する喜びが一転怨念へと変わり、息子へ復讐しようとするのだが、それでも迷い、気持ちをない交ぜにして嘆きつつも息子を裁く。第8巻ということは事件後の訳になるわけだが、サンズは言葉を前後に入れ替えつつ、ニュアンスを変えている。兄弟が惨殺される光景は原典では "tantae" と程度のひどさを述べているのに対して、ここでは感情的な "sad" という言葉で形容されている。さらに "You have won" の一節では、原典で〈これから兄弟たちが勝つこと (復讐の遂行) は不幸であるけれどもしななければならない〉と必要性を強調して自己弁護するのに対して、訳では "male" を "unfortunately" とは取らず、"but, alas, ill won" というように得られる勝利自体がすでに誤りであるかのごとく、自己否定へと向かっている。事件後、血に塗れた植民地でサンズは、同じ船で来た仲間を裏切り者として処刑しなければならなかっただけでなく、現地で交流し尊敬するに至った先住民たちをも生きるた

めに殺さなければならなかった (Davis, *George* 171; *Literature* 57; Price 217)。この一節のずれには、殺戮と裏切りと処刑・復讐へのサンズの心境が透けて見える。

そして1626年版の献辞では、こうした自分の翻訳を以下のように位置づけている。

It needeth more then a single denization, being a double Stranger. Sprung from the stocke of the ancient Romanes; but bred in the New-world, of the rudenesse whereof it cannot but participate; especially hauing Warres and Tumults to bring it to light in stead of the Muses. (Sandys, 1626 "To the most High and Mightie Prince Charles")

訳者サンズは、自らその訳文が〈二重の異邦人〉であることを明かす。元は古代ローマの血を引きながら、帯びざるを得ない "rudeness" については新世界の生まれであるとする。この "rudeness" の意味するところは判然としない。訳された暴力的表現のことなのか、それとも翻訳の拙さ・未熟さであるのか。少なくとも "cannot but" と言うからには否定的ニュアンスがあるのだろうが、VCの関係者であるサンズが〈新世界〉そのものについて否定的態度を取るのには、立場を考えても、また時期や政治の面でも難しいはずである。なぜならVCを推進した次兄はじめ一族・一家そのものへの反抗にもなるからである。そして訳詩に刻まれた静かな抵抗を訳者自身が認めるということであれば、詩神の代わりに持ち出された戦と動乱とは、オウィディウスの代わりに優先された自分の現実の謂いとなるのだろう。原典や作者を差し置いて、自分の置かれた現実がどうしても訳文に反映されてしまう。そのことを自覚してあえて記すことは、自分から出ざるを得なかったある意味の〈誤訳〉を新世界という形で受け入れるということでもあるのだろう。

3

完訳の出版から6年ののち、1632年にサンズは各巻ごとの挿絵計12葉と膨大な注釈で増補した豪華版 (*Ovid's Metamorphosis Englished, Mythologized, and Represented in Figures*) を刊行するが、その際新たに書き加えられた読者へ宛てた文章では、訳文の改訂方針が記されるともに、跋詞を思わせる一文が記されていた。

To the Translation I haue giuen what perfection my Pen could bestow; by polishing, altering, or restoring, the harsh, improper, or mistaken, with a nicer exactnesse then perhaps is required in so long a labour. [...] withall, that I may not proue lesse gratefull to my Autor, by whose Muse I may modestly hope to be rescued from Obluiion. (Sandys, 1632 "To the Reader")

〈わが著者〉つまりオウィディウスの詩神の力を借りて、自分が忘却から救われんことをささや

かに望みたいとする上記の一節は、跋詞がサンズ自身にとって極めて重要な位置にあることを示唆するものでもある。そして実際の訳文でも、跋詞には最後の改訂が加えられている。

And now the worke is ended, which, *Ioue's* rage,
 Nor fire, nor Sword shall raze, nor eating Age.
 Come when it will my deaths vncertaine howre;
 Which of this body only hath a powre:
 Yet shall my better part transcend the skie;
 And my immortall name shall neuer die.
 For, where-so-ere the *Roman* Eagles spread
 Their conquering wings, I shall of all be read:
 And, if we Poets true presages giue,
I, in my Fame eternally shall liue. (Sandys, 1632 510; 下線部筆者)

最終2行は21年のものに近くなり、反語的ニュアンスはなくなる。そしてサンズは〈代弁者〉であることをやめ、ついに自身の声で語る〈詩人〉になろうとする。本人によればその武器は〈作り事という金の槍〉である (Sandys, 1632 36)。ここで初めて "vates" は、預言者・代弁者ではなく詩人と訳される。32年の訳本は、先述したように膨大な注釈が書かれており、その紙幅は訳詩のページ数と拮抗するほどである。また後世、注釈が後年ジョン・キーツ (John Keats 1795-1821) の靈感源になったことや、英文学研究において付された膨大な注釈が政治的に検討されたり、詩行も神話の表象やラテン語・古代ローマ文化の影響といった視点から考察されたりしていることは、まさにサンズが原典から独立して、ひとりの筆者として成立しているということでもある。誰かの代弁者ではない、詩人・作り手としてようやく胸の張れる仕事をしたという点が、ようやく "vates" を〈詩人〉と訳さしめるに至ったのである。

さらに復活した無冠詞複数の〈何らかの〉というニュアンスは、むしろ『アエネーイス』第9巻のニースとエウリュアルスの死に対して歌った詩行を思わせる。

Fortunati ambo! si quid mea carmina possunt,
 nulla dies umquam memori uos eximet aeuo,
 dum domus Aeneae Capitoli immobile saxum
 accolet imperiumque pater Romanus habebit. (Mynors 9: ll. 446-449; 下線部筆者)

ここは「幸せなる二人よ。わたしの歌にかばかりかの力があるなら、／いつの日にも、そなたらは決して忘れられず、後世に伝えられよう、／アエネーアスの家がカピトリウムの揺るぎなき巖に／構えられ、ローマの父が覇権を握っている限りは。」(岡・高橋 420) というのが大意で

あり、アエネーアースの留守のあいだにトロイア軍が襲われたことを、ニースとエウリュアルスが何とか彼に知らせようとするも途中で命果てる、その場を回想して歌った詩行である。不意打ちの襲撃と友らの死は、サンズとアエネーアースのあいだで重なり、アエネーアースが友らの死を乗り越えた先で歌ったように、またサンズも植民地での大量死の果てに歌って訳詩を残そうとする。ここでの〈何らかの〉は、少なくともそうあってほしいというせめてもの希望であり、死者を前に〈いかばかりか〉は力を持ってみせるという努力の意思でもある。

卑しい代弁者から、不滅の詩人へ。詩人は金の槍で物語を作り、真に迫るものであればそのフィクションも〈詩人の誉れ〉となる (Sandys, 1632 36)。またサンズは第5巻の注釈で、詩人とは不朽の名誉に奮い立つものとしている。

[T]he Poet alone is incited by fame, and desire to perpetuate his memory. (Sandys, 1632 189)

そして1644年3月の初め、ジョージ・サンズは植民地で苦楽を共にした甥と姪に看取られ亡くなるが、残された彼の蔵書には次のラテン語が記されていたという (Davis, *George* 267; "Volumes" 453)。

habere eripitur

habuisse nunquam

当時の知識人は家訓のほかに個人的な座右の銘を持ち、蔵書の表題頁に記したとされるが、この4語はセネカ『倫理書簡集』(Lucius Annaeus Seneca BCE 1?-CE 65, *Ad Lucilium Epistulae Morales*)の第98に由来するものである。その大意の「もつことは奪えても、もったという事実は奪えない」(大芝 211)もまた、『転身譜』跋詞と重なるように、死後も生き抜くことを指向している。

オウイディウス『転身譜』の跋詞で詩人が"we"と宣言し、自分とあらゆる詩人・訳詩者を含めた箇所に、サンズは訳者としてその一員という形で参加する。翻訳者による訳語の選択は、解釈そのものの正否というより、むしろ訳者本人のうちで納得できるか否かに拠るものである。そして訳者の変容もまた訳文における変化として現れるが、"we"として自らが含まれる詩行においては影響もひときわ強くならざるをえない。であるからこそ、跋詞の訳文からは、〈代弁者〉から〈詩人〉へ自己認識を変え、〈過去・現在〉から〈未来・死後〉を意識するようになったサンズが見えるのである。

Works Consulted

Davis, Richard Beale. *George Sandys - Poet-Adventurer: A Study in Anglo-American Culture in the*

- Seventeenth Century*. London: The Bodley Head, 1955.
- . *Intellectual Life in the Colonial South 1585-1763*. 3 vols. Knoxville: The U of Tennessee P, 1978.
- . "The Literary Climate of Jamestown Under the Virginia Company, 1607-1624." *Toward a New American Literary History: Essays in Honor of Arlin Turner*. Durham: Duke UP, 1980. 36-53.
- . *Literature and Society in Early Virginia, 1608-1840*. Baton Rouge: Louisiana State UP, 1973.
- . "Volumes from George Sandys's Library Now in America." *The Virginia Magazine of History and Biography* 65.4 (1957): 450-457.
- Drayton, Michael. "To Mr. George Sandys." *George Sandys: The Poetical Works*. vol. 1. Hildesheim: Georg Olms, 1968. lxiii-lxvii.
- Ellison, James. *George Sandys: Travel, Colonialism and Tolerance in the Seventeenth Century*. Suffolk: Brewer, 2002.
- Forman, Henry Chandlee. *Jamestown and St. Mary's: Buried Cities of Romance*. Baltimore: Johns Hopkins, 1938.
- Forry, J. Bruce. "The Virginia Company (1606-1624)." *The Formative Era of American Enterprise*. Boston: Heath, 1967. 1-36.
- Grizzard Jr., Frank E. and D. Boyd Smith. *Jamestown Colony: A Political, Social, and Cultural History*. Santa Barbara: ABC-CLIO, 2007.
- Huggett, Frank E. *The Past, Present and Future of Life and Work at Sea: A Documentary Inquiry*. London: Harrap, 1975.
- Humble, Richard. *A 16th Century Galleon*. Brighton: Book House, 2010.
- Jester, Annie Lash "Domestic Life in Virginia in the Seventeenth Century." *Virginia's Early Years: Agriculture, Tobacco, Land Grants and Domestic Life*. n. l.: Oxford City P, 2011. 201-299.
- Kingsbury, Susan Myra, ed. *Records of the Virginia Company of London*. 4 vols. Washington D.C.: Government Printing Office, 1906-1935.
- Kinney, Daniel, ed. *George Sandys, Ovid's Metamorphosis (1632): An Online Edition*. Charlottesville: U of Virginia Library. <<http://ovid.lib.virginia.edu/sandys/contents.htm>>
- Lloyd, Christopher. *The British Seaman 1200-1960: A Social Survey*. London: Paladin, 1970.
- Mallios, Seth. *At the Edge of the Precipice: Frontier Ventures, Jamestown's Hinterland, and the Archaeology of 44JC802*. Richmond: APVA, 2000.
- Mynors, R. A. B., ed. *P. Vergili Maronis Opera*. Oxford: Oxford UP, 1969.
- Neill, Edward Duffield. *History of the Virginia Company of London*. New York: Franklin, 1968.
- Price, David A. *Love and Hate in Jamestown: John Smith, Pocahontas and the Start of a New Nation*. New York: Vintage, 2005.
- Rabb, Theodore K. *Jacobean Gentleman: Sir Edwin Sandys, 1561-1629*. Princeton: Princeton UP, 1998.
- Rubin, Deborah. *Ovid's Metamorphoses Englished: George Sandys as Translator and Mythographer*. New York: Garland, 1985.
- Sabinus, ed. *Metamorphosis, Seu Fabulae Poeticae*, Frankfurt, 1589.
- Sandys, George, tr. *The First Five Bookes of Ovids Metamorphosis*. London, 1621.
- , tr. *Ovid's Metamorphosis Englished*. London, 1626.
- , tr. *Ovid's Metamorphosis Englished*. London, 1628.
- , tr. *Ovid's Metamorphosis Englished, Mythologized, and Represented in Figures*. Oxford, 1632.
- Tarrant, R. J., ed. *P. Ovidi Nasonis Metamorphoses*. Oxford: Clarendon, 2004.

ウェルギリウス『アエネーイス』（岡道男・高橋宏幸訳）京都大学学術出版会、2001.

オウィディウス「転身譜」『世界文学全集2 ギリシア神話集』（松本克巳訳）筑摩書房、1970、123-440.

セネカ『セネカ哲学全集6』（大芝芳弘訳）岩波書店、2006.

ヒューム、ピーター『征服の修辞学——ヨーロッパとカリブ海先住民 1492-1797』（岩尾龍太郎ほか訳）法政
大学出版局、1995.